

井上輝夫

『旅の薔薇窓』から



井上輝夫氏 (1940年～)

目次

あたらしい黄金の力を 2
古泉頌 3
夕映えの富士を見る野にて 4
春宵の賦 6
湖畔 7
朝影 8
鳥達とわがヘジラ 9
旅情 11
ピントウ・アル・シヤラビア 13
花園歌 14
付記 17
著者略歴 17

あたらしい黄金の力を

おお あたらしい黄金の力よ

おれの血液のコレステロールを清浄せよ

もしおれの血液にラジエタアをつけなかったら

腐りやすい頭蓋はボーフラのわく古井戸に一変する

白昼 太陽はいたずらに死霊どものダンスを照らし

街路樹はねじまげられたい欲情に悶え死ぬだろう

まぶしい朝もお白い女の額に散りはてる

黒びかる笑いだけが電波のように世界をとりまぎ

人類の圧力に人類の遺恨をとかした血液は黒濁し

おれは両耳をふさいで屈原を想わねばならないだろう

そして おれの生存は靴をはいたまま水平線に沈没する

淀んだ深海で現象されるどんなフィルムも不幸だ

おれの血液よ 過熱する前に世界へ流れてゆけ

血みどろの海原を血みどろの天空をつくれ

を惜しむところにおまえの生命はない

そして おれとは激烈きわまる真赤な戦場だ

後頭部からなだれこんでくる無数の凍れる死と

心臓からかけあがってくる単独の狂犬とが

組みうちあう戦場がまさしくおれなのだ

見たまえ 陋巷にしがみついたあわれな生存を

負債に泣き声をあげながら海の夏風にふかれていると

先代の教師たちが墓場から踊り出しておまえをいびつた

瀕死の病人と市立病院でベットをならべ朝の光を喰った時
永遠が流刑人の怨霊のようにおまえをなやまし
おまえのいじけた淫欲をくすぐりにやって来なかったか
おまえの女友達はブロバリンを飲みすぎたし
おまえの親友は喉を鉄管にして麻薬で片足をびっこにした
地におちた青リングゴより一段と罪深い悲しみが
おまえの青春の大草原に降りおちてきたはずだ
見たまえ おまえがめぐりあわねばならなかった煉獄に
木犀の花がスコールのように注ぎはじめ
青くはれた子宮が悠々と全天にひろがり
牛乳を手にしたおふくろの姿がわき出してくるとき
おまえは唇をかみ切っても黙っていないければならない
にぎりこぶし大の心臓をつき出してみせ
三ガロンの血で朝食をつくってもらえばいいのだ
おまえとおれの戦いはまだ終ってはいない
世界の文様がひらひらなびくこの列島の下では
鉄製の憎悪と鉄製の子宮が流行するからだ
おれたちの口が自らの唾で封印されないために
おお あたらしい黄金の力よ
おれの血液のコレステロールを清浄せよ

古泉頌

円い赤絵の皿は割られた 我らの血の風がふく生温い夕暮の街のどこかで。
ゆるやかな落日は青い相模灘に悲しみの雲たちの故郷へ帰り

運河の孤独に酔う詩人たちの胸、目は娼婦のように砂の快樂にひらくのだ
女たちの外套は秋の葉の色をした毛皮、乳房は闇の花冠と燃えるだろう
月影をあび地の酒と言う酒をのみながら夜はなお渴くだろう。

我らは夜に鶴の声 明るい通りをゆく死の声を聞くだろう腐敗の蟻塚
霧たちこめる鉄塔の悲しげな標識燈も我らの流罪に比べればまだ温い
ああまた愚民たちの春 文明の野卑のなかで踊る露骨な欲望の宴
人よ 時にあふれ出る倦怠の都市を死の迷宮とおもうことがある

私は彷徨うだろう、冬の朝の雪の古墳に死の影にたたられながら
太平洋の海辺に波さわぐ季節の純粹の空をもとめて、またおろかにも
イタリアをフランスを、かがやくオレンジの黄金の自然に出会うために
エトルニアの門、凱旋門、忘れられた森の山門をすら踏むだろう
ふたたび 歓びの泉への沐浴と花と雪の大地をそめる栄光の故郷へと。

そうして、今は見る 鎌倉の武士たちが水をくんだ古い泉
とおい宇宙がそつとのぞき、入水した女たちの香りを残した緑色の水
ああ 歌ってくれないか みがかれることもない銅鏡の、朽葉がゆれる唇よ！
燃えたつ中世の夏をうつし人間はなおも高貴な愁いをもっていたと
水よ 中秋の月、失われた恋、朝雲のたゆたう永遠の慰めを！

夕映えの富士を見る野にて

白扇倒懸東海天 石川丈山

柘植の実をついばむ野性の鳥よりも暗黒の窓からむらさぎの野辺へ
夕映えの富士を見に私は急ぐ 丘陵の上になびく彩雲はそこにあり

西に燃える日輪は白い冠の富士にかかり私はこの一時の静けさを愛する
水をよごす暗鬱な思想 流れゆく血の音楽をせきとめる苦渋の表情
どうしてそれらを愛しえよう ああ 清らかに燃える夕映えの宇宙よ！

けれど 私の魂は詩仙堂のように鹿追いの音もたえ暗愚の嘆きが響く
その汚濁が清らかな星の光を凍った地上に埋葬する冬

路傍の草々の中に血の薔薇の歌塚をみて生きるものの闘いに涙する

二十世紀の白髪いしたたみの太陽が都会の 燈しんたみに影の希望を照らすあいだ
闘いの武器をとるよりも 時に軽やかな富士の姿に祈りたい

ごらんなさい 文明の下では自然は病む花の蒼きかおりを放ち

群衆は夢魔の暗い海を夜光虫のよう脅えつつ漂ってゆくのを

それはむしろ荒野の死 死の秃鷹のまう砂漠よりも渴いて

詩が虚しい以上に儂ない形象のうちで人々の死には挽歌も尊厳もなく

ああ 私は盲いた無に還りたい 無が幾度か死にかえる生の花なら！

野は暮れなずむ 魂の林に飛んでくる希望の鳥よ 嗚なぐいは私の胸

虚栄につかれた不眠の夜よ 汝の寢床は私の胸 この柔い血の胸

古代の愛が祈る声のように静けさに花綵を織るあいだに

少女の肩の水甕にあふれる透明な水に心がかわらなければ

全てわれらの所業はかりそめの旅にすぎない かくて野はくれて

丹沢の山々は紫に 夕映えの富士は火の扇 夕べの星は登りくる。

春宵の賦

千古の花影を想えば悲し　この薄暮の宵、音の風鈴のゆれる庭
つつじは露台の春に白く匂い秋を想うなと咲き誇る夕闇に
微風の裾のようにゆれるカーテンの部屋に、夜の沈黙は滲み入り
大雅堂の掛軸をとく貴女の指は水底の鏡となつてゆらめく
椿の花が無残におちる静けさの中　裏山の山寺の梵鐘の音
ひくい屋並の街を走りわが恋心の畑中の路をかすめて消える

あたかも粉ふく青空の残月のような貴女は微笑むことはないか
火山の湖水の漣のように憂愁の天空を湛えた心のために！

長雨のような二十世紀の奈落の光をも知らず　魂の五位鷺は
露と百姓家、峠の道を夜の足と競つて越えてはきたが

芳しいこの季節に私は何を贈れようか、この地で貧しい私は！

想い出す　昼の月　中世の茶に目醒めたロンバルディアの岡。

この五月、矢車のからからと鳴る間、貴女は沈黙の波間に舵をゆだね

清らかな影の落ちかかる庭の石に、はた、静かな地上の宵に

ああ、貴女は時おり天上の露台に肱ついて彼方を眺める

私が二人の孤独の空隙に虚しく權の音をひびかせる時に

「何処に行くのですか」この間に天上の海原はふと騒いで

貴女の雪花石膏アラバスターの想いに幾度も青く打ち寄せる私の舟。

こうして別れる時が近づくのなら人を避ける孤独が始まろう

一時の歓びの帰りにも月の光を畏れる夜の明るさもあるだろう

「さようなら、又、会いましょう」　汝は夢中の白い路を

いたずらに見知らぬ季節の下 茂る萱の林を辿る女人
「さようなら、又、会いましょう」 その夕漁火も消えた海路
けれど昼の月の女 この春宵の燃える闇は私のものではなからうか。

湖畔

太陽がわが心より紅に外輪山のなみうつ稜線を飾る
静かな休火山の夕暮、沈める青銀の杯盤にうつる粧いの夏
岸辺に指輪のようにさく紫陽花 幻の天地に鳴く鶯の声
この土地のもの淋しい景観は俗世に燃えんとする心慰め
ほおづき色の空をきり、わが視線の涯にとぶ真白な鳥

ああ 巨いなる捲雲の鏡、重々しい山影をうつす湖
漣にちる赤光の煌き、沈黙の水をたたえた眼の湖よ
かくも青い寂寥は何か、日々舟の航跡を消してよみがえる孤独は
おまえは夢みているのか、この天地が熱い炎で戯れた目を！
はいよる山霧がはきけす水中花のようにかぶ女人の面

蒼い死の路を歩むように霧の草野を私は求めた
踏みしだく草陰に獣の白骨 眼は盲いてさらに咬くみる
風さながらに地平の涯に消えつあらわれる蝶の面の冷さを
踏みしだく花々に怒り 固い岩層の下にもえる心を恨み
心狂える旅人のごとく 水音のみ高い淋しい夏を見送る

夜はまた近よる 千年の静けさに帰る林 深い眠り
山霧にけむる月は音なき光を草間に投げ、なお天に落ちず

虚しい地上、忘却は強くわが季節の微笑の花は影にかくれ
虚しい誓いなき日夜、疾駆する斑の雲は獣の香りをのせて飛ぶ
夜の鳥、風は樹々の梢を刈って、冷気は宇宙にはりつめる

ふりかえると巨いなる湖面に拡がる霧の白い闇。

朝影

平潟湾風景

息もつめて

紅葉の燃える丘に登れば

千鳥のいない平潟湾に貧弱な裸婦の秋

こんな眺望にいまだ俳諧の鳥が舞って

仔猫の死骸のある磯に嘎れた声を投げ、

東に千年王国論を赤い口で叫ぶ太陽がふたたび

追われてゆく樹々の長い足を軽くして、

神学的意味での煉獄インフェルノにふたたび

神のない素白の暦をまた加えるのだ。

こうして現在にガアッと突出した隆起大地は

出戻りの白雲とともによみがえり

終末をみた眸に残月の狼唄をそそぎこむ。

昨夜十時、秘蹟のように咲いた

月下美人さながらに首をかしげる朝影、

多くを語らない偽りの目差しをめぐらし

青黒い鮫肌の海原を、実は

眺めてもいないこの世ならぬ朝影よ、

おまえは夜に還りおくれた悪夢の余韻
あるいは故郷に裏切られた浦島なのか。
平野に横たうむらさきの朝餉の煙に

帰帆する梭子魚型の

舟、舟、舟、

こうして心臓の血に脈うつ天宮と、
星の駒が整然たる神の将棋盤とが
一本の刃できり裂れてある秋
光の通過する痛みにゆらめく朝の影。

鳥達とわがヘジラ

ふわり静寂が落下してくる

平和といえど平和な夕

ブタ草のみだらに繁る路に

充血した月は靄ぶかい夏の終りに溺れ

馬小屋の匂う魂は拷問にたえた

何という皮はぎの儀式、西瓜売りの声！

美と優雅の思い出は月見草の茎に光り、

残念、散歩する哲人の影にさえ出会えなかった。

けれど疑いようのない異邦の石の森で

私の眼を破つてとびたつ一群の白鳥、

思いのかぎり病んで、コリント式列柱の雲から

おお、夜空へ首を長くした、ヘジラ！

嘆く必要もなかったのだ、純白の中世の思想よ、
「神酒の海」が茫々と輝いているのだから、
それが我々の神話の生誕だったのだ。

そのかみ

將軍塚を濡らした悔恨の驟雨

偉大なるよどみの水底で青緑に苔むし
季節はずれのだだっぴろい渚の、幻日の渚に、
ひとり女がゆらいでいる。

虹の橋、夢の浮橋も、みな崩れて
風だけが物好きに履歴書を繰っている。

不滅だったのは人間の放浪だけ！

窓は何という痛ましい四角の眸か、
ふとみれば、狂った詩人が飼っていた

あの大鴉がテラスの窓辺に濡れている

死の炎に焼かれて来たのだ、喪服の鳥は、
けれど、長征の翼よ、ここもまた中世の部屋、

妖術の食卓^{テーブル}とてないのが悲しく

機械じかけの夜が端座するばかり。

そのころ

霧のなめるアルプスの陥没湖で

身ひとつの難民の行列のように

飛翔につかれた数百の水鳥がまどろんでいる。

漣にゆられる太古の夢……

自由と開花の楽園の夢……

いまは名もなき数百の朝の墓標となって

かれらもまた同じ水にひたることはない！
ときに冷水で羽根を洗うのも、（何と従順な奴等か）、
ナルシスの陶酔のためでなく、
実は、きたるべき落下をととのえるための
聖なる儀式、蒼空への供養なのだ。
そうだ、知るべきだったのだ、水鳥よ、
架空の静まりかえった時間のなかで
幾万回の地上の秋が黙々たる職人のように
樹々を象牙細工に彫る夜
ヘジラを生きるものの信仰を。

旅情

地中海の見える白い坂を
二十世紀の旅人は
クリスタルの孤独へ下った。
アウグスタス帝の崩れた戦勝碑、
流れる雲のかたくなな沈黙の丘、
田園の麦藁の香りのする
閑かさを知らず疾駆する風、
ミモザの花が撒く黄金の破片も知らず
瘦細った肉体を三日月におり曲げ
ある破壊の夢に蒼ざめて憑かれた者
汝の名は、大地の屑屋、
宇宙の美しい粧いの時刻に
あやうい火の星と戯れる野の鳥だ。

かなたの嶺の白雪も

修道院の葡萄棚も

終末の日のためにひとり熟れるのか。

汝、ヘラクレイトスの大理石の顔を思うな！

《万物流転》

それは魂の喜びだから

永遠のための天地の序章だから。

アシッシェをもって流浪していた金髪の娘

夕陽にひびく村々の謝肉祭について

フランシスのような詩篇をかこう。

だが、小雀ロリオの翼は

内に炎上するバビロンに消え

春だというのに野に残る

白い冬の跡、

ひとたび神が追放された明日は

寒々した羞恥の旅にでて

路々の道標をふたたび問うのだ。

みよ、この旅人は古い鐘が鳴る

イタリアへの途を

伴にする可憐な乙女もなく

子供の耳でサイレス絲杉サイレスに聞いている

啓示、不安な誘惑の旅。

ビントウ・アル・シャラビア

『美しい少女』と題するシリア古謡に惹かれて……。

下手投げの木枯しに

夢の頁が薄闇に翻る

尾羽打枯した日本酒匂う夕映え

交尾する蛇さながらに

静かに渦巻く都会の冬、

もはや羊飼いの星は輝かず、

悔恨の風情に凍る下弦の月。

時に、耳を抉る古笛と歌声

へビントウ・アル・シャラビア

驢馬の背に花嫁のように

白い盛夏をのせるアラブの曠野に

きらめく黒髪を左右に飛ばし

波にのる野の花に捧げられた歌

へビントウ・アル・シャラビア

優情に溶ける心の鬼界ヶ島。

炎暑の中の早春賦、

アレppoの夜風よりなお清楚に

八世紀の微笑を桃顔にたたえて

乙女は、鄙の乙女は、

泉水の喋る内庭に吹いてきたことか。

純潔なトルコ石の空にもいた

金輪際より深い君の青灰の瞳に、

夜の媚、天の河も色褪せよう。

なよ竹の楽を奏でる歩みに、
魂の渴きは潤い、喜びの風が還ってくる。
君を通して、君の香りを通して、
自然の最も遠い恵みの野に
奇蹟の百合が咲くのが見える、
ビントウ・アル・シヤラビア！
かつて繊細な平和が村々を愛し、
太陽も矢車となって滑走した夏、
乙女よ、君は懷疑を笑った夢、
ああ、踏まれるなかれ、野蛮の季節に、
君自身の円やかな生命を。

悩む薄日にかげる影法師の巷、
時に、耳を抉る古笛と歌声は
へビントウ・アル・シヤラビア
二重、三重、木霊する夕べの冬に
今に知る望郷の高鳴り。

花園歌

暗闇坂に逝った人の二月
夕闇のヴァイオレットの翼の
かるい酔いのめくるめきは
泪ひとつない透明な別離の国へ渡った。
仮面と鉄の橋の神経状の都市は
ドツと吹く風にみるみる葦原となり

赤い実ひとつ、大谷石の崖に

肖像画の太陽は凍りついて動かない

優雅な水銀灯も、臭い夜の吐瀉物も

北海に舞う海猫の叫びにたたられる。

たち去った魂よ、この墓地にた長身の街に

ゴンドラのように揺曳する八億四千万の

日々のよみがえる生命消費の悲劇に

恨みがちな塩をまかないでほしい。

夜の此岸にふと脚おろす鳥、

胸撞く鐘の真理に白い花をそえる時だ。

生きるという至上の韻律は

野茨の味がする、としきりに想う。

そうして春の雪にひかる夜の庭

その記憶の土を掘りおこす自由の園丁

枯れた薔薇の神学の枝葉を刈って

蕾として眠る深い愛に水をそそぐきみ、

私は窓をとざし考える、永遠にた園丁よ、

ボードレールの憂鬱の終末の空に

生者らの夢々の夢の一筋を

螺鈿の数しれない天の指輪とする手、

ひとつの歓喜の戦慄を青い伽藍に奏で

少年の日へ成熟する海原の息吹きを、

おお、わが園丁よ、喪服をきた難民が

むなしく踊る寂寥の宴を

どんな慈愛の光で照らそうというのか。

園丁よ、やがてくる夏の朝には

幻の浮橋を渡り、旅に出ようではないか。

それが第一日より詩人の運命ならば

海猫の騒ぐ風景を推敲して何になろう

水車の鳴るオロント河を横切り、

サマルカンド旧市街で黒衣の女と話そう

時に水となり澗谷を鉄砲より早く

時に一切をおし流す静かな力となり

ひたひたと存在の舟板を洗い

瞑想の古代的泉へ逍遙の路にそってゆこう

ああ、いつか死の咲く丘に立てば

この脳髓に刻まれた地の痛みも軽く

きみの純白の言葉も雲のように

素早い影を金色の寺院に落すことだろう

園丁よ、宇宙の園丁よ、殉教者の舌に咲いた恍惚は

どこまでも夜の恐怖を飾ってくれようか。

外は雪、外は氷花の舞いに墨色に埋れ

死して生きる者の眠たげなガラス窓辺に

立ち去った時間の寂しい影が寄りそう

けれどあふれだす白紙の夜に

不思議な自由が、不思議に明るい時が、

盲目の舞人のように通りすぎてゆく

この時、静かな錯乱に接吻するこの時、

大地の、幻の大地の熱い涙の声が戻ってくる

すべて善し、

すべて善し、と。

〈付記 収録詩篇について〉

詩集『旅の薔薇窓』（一九七五年・書肆山田）に収録されたものから十篇

井上輝夫（いのうえ てるお）

一九四〇年、西宮に生まれる。詩集に、『旅の薔薇窓』（一九七五年）、『夢と抒情と』（一九七九年）、『秋に捧げる十五の盃』（一九八〇年）、『冬 ふみわけて』（二〇〇五年）。主な著書に、『聖シメオンの木菟 シリア・レバノン紀行』（一九七七年）、『詩想の泉をもとめて』（二〇一一年）、『ユトリロと古きよきパリ』（一九八五年・共著）、訳書に『流謫者ボードレール 生涯と作品』（マルセル・A・リュフ著・一九七七年）、『千一夜物語 ガラン版』（二〇一一年）など多数。